

# 大学教育学会誌

第27卷第1号(通卷第51号)

2005年5月

抜刷

研究論文

## ハーバードのカリキュラム改革: コア・プログラムからカレッジ・コースへ

深 野 政 之  
(桜美林大学)

### A Study of the Curriculum Reform at Harvard College

FUKANO Masayuki  
(Obirin University)

Harvard University announced a 1 - year review of the Harvard College Curriculum in April 2004. The Review Committee examined the world famous Core Program and suggested a new concept of Harvard College Course should be introduced to replace the former. The Core Program had been ineffective for the last thirty years, but in recent years it has been criticized by faculty and students because of its disregard for natural sciences, difficult requirements for required subjects, heavy teaching load for young faculty members and so on. In the new College Course a lot of innovations in curriculum are recommended as follows.

1. Every Harvard College student should be expected to complete overseas study experience and should also be taught natural sciences, as well as the humanities and social sciences which are traditionally taught.
2. Harvard's concentrations (majors) should entail fewer requirements and the timing of concentration choice should be delayed to the middle of sophomore year.
3. Small tier classes (freshman seminars & junior seminars) and compulsory senior thesis research should be introduced to encourage intellectual controversy. The University calendar should be unified beyond the calendars of these several faculties to introduce experimental programs.

These recommendations are considered to be a new challenge for Harvard to reaffirm its commitment to a liberal education in an age of specialization and professionalization. However, these changes are not necessarily innovative in the context of curriculum reform in U.S. colleges and universities. It may be said that the changes have come rather too late.

〔キーワード:ハーバード,カリキュラム改革,学士課程教育,「一般教育,コア・プログラム,カレッジ・コース〕

### はじめに

ハーバードといえばアメリカ国内ばかりでなく世界中から最高の高等教育機関と評価を受けてきた。そのハーバードの中でも文理学院'(Faculty of Arts & Sci-

ences:FAS)は、全世界から最優秀の学生を引きつけ、超エリートを輩出してきた。ハーバードは学生に最高の学士課程教育を与えていることを誇りとしてきたし、その学士課程カリキュラムは、アメリカの大学ばかりでなく全世界の大学から注目を集めてきた。

そのハーバードが2002年10月から1年半にわたって学士課程カリキュラムの自己評価を行ない、世間の注目を集めている。現行の学士課程カリキュラムは1978年に改訂されたものであるが、今回の評価は約30年間続いてきた学士課程教育を総合的に評価し、改革を提案することを任務としたものである。評価委員会はW.C.カービー文理学院長2)とB.H.グロス学士課程教育部長が共同委員長となり、一般教育、専攻、教育学

(pedagogy)、学生の学術経験(students' overall academi cexperience)という4つのワーキンググループを設けた。それぞれのグループにはテニュア教員3)、非テニュア教員、他学部教員、大学院生、大学職員が1名ずつと学部学生2名が入り、様々な層からアイデアを集めるために多くの学生、教員、職員、同窓生から意見を聴取してきた。

その結果、2004年4月にカービー文理学院長は70ページにわたる評価報告書(AReportontheHarvard CollegeCurricularReview)4)を発表した。報告書では、現在の学士課程教育の問題点を率直に指摘するとともに、コア・プログラムの改廃を含んだ学士課程カリキュラムの全面改革が具体的に提言された。

本論ではハーバードの現行コア・プログラムの問題点と、報告書に盛り込まれた改革提言の分析に焦点を当てて考察を行なうこととする。

#### (1) 先行研究

日本国内においてもハーバードの学士課程カリキュラムに関する先行研究は数多いが、コア・プログラムを紹介した書としては、『ロソフスキー教授の大学の未来へ』(佐藤隆三訳、TBSブリタニカ、1992)がわかりやすい。また清水畏三「ハーバードの一般教育改革、教員任用など—H・ロソフスキー前学部長に聞く」(『一般教育学会誌』第8巻2号、1986)、本家真澄「アメリカの大学における一般教育の実情視察報告」(『大学資料』100号、1986)、W.ジェイムズ「米国における大学改革：ハーバードの場合」(『京都大学高等研究』4号、1998)等では導入当初の改革理念が紹介されている。さらにWB.カーノカン『カリキュラム論争：アメリカ一般教育の歴史』(丹治めぐみ訳、玉川大学出版部、1996)や田中義郎「アメリカの大学のカリキュラ

ムの趨勢：コア・カリキュラムの開発と発展」(『高等教育研究紀要』19号、2004)では最新の現行コア・プログラムを紹介している。

これら先行研究の多くはハーバードのコア・プログラムを理想的なカリキュラムとしてその理念や制度を紹介するに留まり、日本の学部教育との比較を行なっている例もあるが、コア・プログラムへの批判的分析はほとんどなされていない。ただ今井重孝による「ハーバード大学」(有本章編『大学のカリキュラム改革』Ⅲ部3章、玉川大学出版部、2003)等の論文では1997年のヴァーバ委員会の報告5)が紹介され、コア・プログラムの問題点が指摘されている。

#### 学士課程カリキュラムの略史

ハーバードの創設は17世紀に遡るが、創設期以来200年以上にわたってハーバードのカリキュラムは、イギリスの古典的カレッジと同類のものであり、ギリシャ・ラテン文学、神学、道徳哲学、数学などの教科を、全て必修授業として同じクラスで受けるものであった。これはクリスチアンの紳士を育成するためのプログラムと言われてきた。

19世紀後半にC.エリオット学長の下で、ドイツの近代大学をモデルにした劇的な改革が行われた。それは選択システムの導入であり、作文以外の全ての必修を廃し、物理、音楽、美術などの選択科目を導入するとともに、古典語よりも現代英語を重視することやドイツ流のゼミナールを導入するなどのカリキュラムの近代化が実施に移された。

やがて20世紀初頭には自由選択科目方式が行き過ぎているとの批判が起こり、L.ロウエル学長により、授業を分野ごとにグループ分けし、グループの中から選択必修させる仕組みが作られた。学生は自分の専攻する分野を深く研究するとともに、他の分野からも一定単位数を学ぶことによって幅広く教育されるべきであるという考え方が、ここで定式化された。

第2次大戦中にJ.B.コナント学長は「自由社会における一般教育の目的委員会」を作り、ハーバード・カレッジだけでなく、より広くアメリカの教育全体における一般教育の概念を明確にすることにした。この委員会は1945年に、人文、社会、自然の3分野から1学年に1科目ずつ履修する「一般教育プログラム」の提案を含んだレッドブックと呼ばれる報告書を提出した。

その後30年を経て、1974年には文理学院長H.ロソフスキー6)の主導の下にコア・プログラムが提案された。市民権運動やベトナム戦争を契機とした学生紛争を経て、

大学教育、とりわけ学士課程教育では、知識自体の習得よりも知識習得の方法を探求することが目指されるべきであることが強調された。そのためには人文、社会、自然という伝統的な学問領域別の分け方ではなく、現代社会が必要とする課題別構成によって、より多くの選択科目を置くことが必要であるとの提言がなされた。さらにハーバードの優れた教員資源の中心を学士課程教育に振り向けるべきであるとして、教員との契約内容を大幅に見直した、この改革案は1979年から実施に移された。

## 1. 現行コアプログラムの問題点

### (1) 報告書に指摘されている問題

今回提出された報告書では、ハーバードのこれまでの学士課程教育、とりわけコア・プログラムに対しては一定の評価をしている。すなわち、多くの授業は一般学生にとってわかりやすく選択しやすいものであり、また、ある分野に進もうという意欲のある学生にとっての導入授業となりうるものだった。さらに担当教員にとってもコア・プログラムの授業は、学生に幅広く教えることが出来るし、自分の専攻学科とは違った領域を教えることができて好評であった。多くのコア・プログラムの授業では上手に教えられており、他の授業に比べて教育効果が高いものであった。

とはいえ、報告書には次のような現行コア・プログラムの問題点が指摘されている。

- ・コアの領域が明確でなくなっており、教員でさえもこの科目がこの領域にあって、もう一つの科目が別の領域にあることの区別がはっきりと説明できない。
- ・コアの必修要件が厳しいために、学生が自分の能力や志望より低レベルの授業を受けなければならない。
- ・その逆に、領域によってはコア科目が多くの専攻の必修要件とならないために、履修者が一つの専攻の学生だけになってしまう例がある
- ・コア・プログラムの必修要件を満たすためには限られた選択肢しかなく、学生の多くは大人数授業を選択せざるを得ないため、教員との接触が十分でない。
- ・コア科目の授業内容(タイトル)が個々の教員の意思で決められるために、学生が履修したい内容の授業が開設されない場合が少なくない。
- ・コア・プログラムの必修要件を満たすためには限られた選択肢しかないために、学生の知的発達に制限される可能性がある。

### 教員・学生から出されている批判

報告書で示された以外にも、学生や教員から出されている不満と批判には見逃せないものがある。ハーバードで2003年11月に2回にわたってシンポジウムが開催された。その場で現職教員から示された批判<sup>7)</sup>としては以下のようなものがあった。

- ・コア・プログラムが自然科学を軽視しているために授業数が少なすぎ、生物学や経済学のような急激に進歩している分野をカバーすることができず、時代遅れの科目が残ってしまい、結果的に大人数授業が多くなりすぎる。
- ・コア・プログラムが、知識の内容ではなく知識を習得する方法を重視しているために、特に人文科学分野では現代文学の有名作家を知らなかったり、東西文明の古典を知らなかったり、宗教的哲学的伝統を学ばないというように、共通の知的経験というものが与えられない。
- ・1997年に専攻科目のいくつかをコアの代替単位に換算することが認められたにもかかわらず、インセンティブがないために自専攻以外の専攻科目を選択する例がほとんど見られない。
- ・現在は多くのコア科目が若手の教員によって教えられているが、むしろ経験のある教員が担当する方が教員のためにも学生のためにも良い。

学生からの批判の例として『アメリカの先史芸術：メディアとテーマ』というような授業は、一般教育の授業として狭すぎるとの指摘がなされている<sup>8)</sup>。評価に加わった大学院生の一人は「必修条件がとても厳しく複雑で、しかもその論理的根拠がはっきりしていない」<sup>9)</sup>ことが、原因になっているとしている。

### 問題点の分析

ハーバードのコア・プログラムが完全なものだと主張する者は、今ではほとんどいない。本来のコア・プログラムは、大学教育を受けた卒業生が良き市民として共通に身に付けているべき知識・思考方法・訓練を与えることを目的としているが<sup>10)</sup>、現在のプログラムでは学生に共通の経験を与えているとはとても言えない。1970年代にH. ロソフスキー文理学院長が主導してコア・プログラムを立案した際には問題点として想定していなかったことが、30年にわたる実践の中で浮び上がってきた。さらには社会の変化の中で、世界最高といわれるエリート学生の水準も大きく変わり、30年前には問題にならなかったことがカリキュラム構成上の問題としてクローズアップされてきた。

第1に、ハーバードのコア・プログラムは、文学と芸術A、文学と芸術B、文学と芸術C、科学A、科学B、歴史研究A、歴史研究B、社会分析、外国文化、道徳理論、数量的推論の11領域が設定されているが、この領域設定に一貫性がない。歴史研究、道徳理論、社会分析、数量的推論は研究方法上の分類であるが、文学と芸術、外国文化、科学は教育内容上の分類であり、この構成原理の不揃いは報告書でも指摘されている。

第2に、各領域内の科目が体系的に組み立てられていないことである。各学生は一つの領域から一つの科目だけを選択するので、領域の中の科目群に体系など不要と思われるかもしれない。しかし学生が一つの領域から一つの科目を選択するには、他の6領域から選択するコア科目との関係を考えて選択しなげなければならない。そうすることにより自分の志望する専攻に役立つコア科目となるといえる。ところが現有教員スタッフの都合に合わせた科目の立て方をするのは、学生が必要とするだけの科目を網羅することは不可能である。

第3に、コア科目のテーマが狭すぎるという指摘がある。例えば社会分析という領域の一科目に「Knowledge of Language(言語の知識)」がある。この科目は現代言語学の基礎を扱うものであるが、これが社会科学の概念と分析方法を取り扱う社会分析という領域にとって適当であるか。このような科目のテーマに関する学生からの不満は根強いものがある。長年にわたって高等教育のカリキュラムは共通必修、

選1必修12)、自由選択の間を揺れ動いてきたが、ハーバードの現行コア・プログラムは30年の歴史の中でコア・プログラム本来の共通必修の理念から大きく離れ、典型的な選択必修のカリキュラムになってしまったために、カリキュラム本来の理念と、教員の意識、学生の意識がそれぞれ乖離してしまう結果になったと言わなければならない。

## 2. 新カリキュラムの内容と特徴

### (1)ハーバード・カレッジ・コース

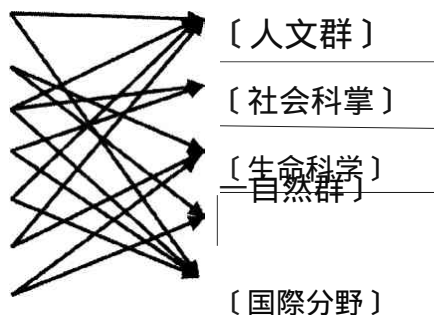
今回の報告書による学士課程カリキュラムの全面見直しは多岐にわたるが、その中で最も特徴的なのが2007年度からコア・プログラムに換えてカレッジ・コースを導入するという提案である。

コア・プログラムは自分の専攻とは違った学問分野の知識へのアプローチを強調したものであったが、カレッジ・コースでもこの考えは継承するとしている。カレッジ・コースの詳細はまだ決まっていないが、それぞれの科目はコア・プログラムと同様に課題別のテーマで設定する。しかしコア・プログラムが現代的・学際的な分野構成をとったのに対し、カレッジ・コースでは伝統的な知識で構成された人文科学や社会科学、生命科学、自然科学といった学問構造を基礎に領域を設定することになっている。さらにその中でも国際分野や自然科学分野が重視されるとしている。(図1参照)

### コア・プログラムの領域

画  
嫡  
圃  
翻

### カレッジ・コースの領域



(図1)

つまり、自分の専攻と違う学問分野の知識や習得方法や研究方法を学習するためには、科目を構成する領域設定は伝統的な学問構造を基礎にすることが合理的である。なぜなら知識の習得方法や研究方法といったアプローチ方法は、知の分野の学際化が進んでいくにおいても

伝統的な学問分野ごとに大きく違っているからである。このように選択必修上の領域設定を改革するとともに、カレッジ・コースでは、コア・プログラムより学生の科目選択をより自由にし、知識や概念、古典への導入をより徹底して行うことによって、専攻分野への準

備を行なうことを目指すことにしている。

## (2)改革の具体案

カレッジ・コースへの改編に伴い、今回の報告書には以下のような具体的提案が列挙されている。

### ・必修単位と専攻決定の時期

各専攻(メジャー)の目的と構造は、これから教育政策委員会によって検討されることになるが、現在ハーバードの学士課程の半分以上を占める専攻の必修単位を減らすこと、さらに1年次に行なっている専攻決定時期を、2年次の中頃まで遅らせることが前提となる。専攻決定の時期を遅らせることは、一般教育の必修要件をより柔軟にし、学生が専攻分野での高度な学習に取り組む前に、より幅広い知職探求の機会を提供するためである。

### ・少人数クラスと演習

教養教育は学生と教員の共同作業であるので、学士課程の全体において、特に必修ゼミナールのクラスサイズを少人数化する。そのためには教員の数を大幅に増やす必要がある。

### ・国際分野と自然科学分野

学生が外国での研究や調査を行なうこと、さらには国外留学を積極的に奨励する。また、入学時の外国語能力に関わらず、外国語を使用した研究を続けることが期待される。

人文科学や社会科学のみならず、自然科学に対しても全員が広く深く教育されるべきである。

### ・学年暦の調整と実験プログラム

全学の学年暦を調整し、1月をキャンパス外学習等の実験プログラムのために確保する。

### ・卒業研究

4年次に論文作成あるいは高度の研究プロジェクトに参加することが必要である。教員の指導の下に、キャップストーン経験<sup>3)</sup>をすることを通して視野を広げることが望まれる。

### ・アドバイザー・オフィス

学生に対して学術面での助言や履修指導をするためのアドバイザー室をつくる。

このようなカリキュラム面に関わる改革以外にも、新入生を上級生と同じ寮に入れるようにすることや、学部教員の中心任務が学士課程教育にあることを明確にしている点でも注目される。ハーバードの教員が教育力を今まで以上に高め、学生たちに知識を与え、訓練を行ない、そのことによって人生の基礎となるスキルを与え

ることができるようになることが期待されている。

## 改革提案の問題点

それではカレッジ・コースを始めとする改革案は、現在のハーバードの学士課程教育に対する批判や不満を解消することになるであろうか。さらに今後数十年間にわたってハーバードの学生に最高の学士課程教育を与えることができるであろうか。

コア・プログラムの問題点として指摘されている領域設定の不整合・不明瞭については、カレッジ・コースが伝統的な知識で構成された大領域-人文科学、社会科学、生命科学、自然科学といった学問構造一を設定することによって、多少なりとも改善されることになろう。各領域内の科目は課題別に設定するにしても、領域として伝統的な知識で構成された学問構造を設定するならば、領域内の科目の網羅性は把握しやすくなるはずである。また、知識へのアプローチの方法は、伝統的な学問分野によって大きく違うものであるから、伝統的な学問分野による領域設定は「自分の専攻とは違った分野の習得方法、研究方法を学ぶ」という理念に沿うものと言えるであろう。

とはいえコア・プログラムで問題とされていた、科目や授業内容(タイトル)が現有教員スタッフの都合に合わせて設定されているとの指摘は、カレッジ・コースによっても解消されないのではないだろうか。領域設定、科目の立て方をどのように合理的に組み立てようと、実際の開講授業設定や個々の授業運営が改善されない限り学生の不満は消えないであろう。今回の改革提言ではこの点の解決を、教員任務を再定義するとして教員の意識改革に求めているだけであり、カリキュラム上の具体的な改革策は見られないようである。

ハーバードでは従来、学生が在学中に留学することがほとんどなかったが、これはハーバードが自らの教育に自信を持ち、他の教育機関に学生を預けることを好まなかったためと言われていた<sup>14)</sup>。今回の提言では留学を積極的に奨励し、さらに学外での学習参加を促すために学年暦のうち1ヶ月を確保するとしている。また従来、ほとんどの学生は強制しなくても専攻分野での研究を完成させて卒業していたが、そのような前提は現状では楽観的に過ぎることが明らかになり、これからは卒業論文または卒業研究を義務づけることにした。いずれもハーバードが学士課程教育の現状を不完全なものであり自己批判したものであり、それ自伽ま必要なことであり評価できる。

しかし、このようなカリキュラム上、教育システム

上の問題ばかりでなく、教員意識の改革にこそ主眼があるはずである。今回の改革提言では、教員の任務を学士課程教育中心に改革することを強調している。確かに報告書には学士課程教育の意義や教員の意識改革の必要性については多く記されているが、それをどのようにシステムとして担保するかに関する言及はない。最高レベルの研究者でもあるハーバードの教員の意識を、学士課程教育に向けさせるのは至難の業であろう。まして数世紀にわたって最高の学士課程教育を与えてきたと自負しているハーバードの教員にとって、これまで以上に教育面に時間を割くことには強い抵抗があると思われる。しかし、だからこそ教員の意識改革のためには理屈や情熱だけではなく、契約における教育義務の設定や、給与面・研究資金面でのインセンティブ、評価システムへの反映といった具体的な方策が提案されなければならなかったのではないだろうか。

## 榔

以上、報告書に沿ってハーバードの現行学士課程カリキュラムの問題点と、その改革提言について考察してきたが、コア・プログラムの全面的見直しをはじめとする学士課程教育の改善策は、アメリカ国内の他大学では既に何年にもわたって実践されてきたことである。高等教育専門紙The Chronicle of Higher Education(2004年5月7日)は今回のハーバード大学のカリキュラム改革を取り上げ、"What's Wrong with Harvard"と題した記事を掲載している。記事では、報告書に盛り込まれた提言の多くは特に目新しいものではなく、改善策のほとんどは他大学では何年も前から始めていることである、としている。また同誌で紹介されているイリノイ大学シカゴ校のグラフ(G. Graff)教授は「数十年前か百年以上前に書かれた他大学のカリキュラム評価報告書に盛り込まれたものようだ」と指摘。またジョージ・ワシントン大学のS.J.トラッテンバーグ(S. J. Trachtenberg)学長も「古いワインを新しいボトルに入れただけ」と手厳しい。少人数クラスにより教員との接触の機会を増やすことや、国外留学の機会を設けること、学生の表現能力を重視すること、人文系の学生にも自然科学の学習が必要であること、といった改革は決して急進的な課題ではないと指摘している。カレッジ・コースで採用される伝統的な学問分野による領域設定も、多くの大学で既実践されていることである。現在のコーネル大学の蹴修科目は、「物理・生物科学」「数理・論理学」「社会科学・歴史」「人文・芸術」という領域設定をとっているし、UCLAの一般

教育も「人文(文学、哲学、言語学、文化・文明、芸術)」「自然科学」「社会科学」「生命科学」という領域設定である。グレート・ブックスによる共通必修カリキュラムで有名であったシカゴ大学も、現在では選択必修型の一般教育を「人文および文明研究」「自然および数理科学」「社会科学」「外国語」という領域設定で行なっている。これらの優秀な学生を集める有名大学ばかりでなく、多くの州立大学やリベラルアーツ・カレッジでも一般教育の領域設定は、早い時期から伝統的な学問分野によって決められてきた。

こうした現在の改革の多くは、いくつかのカリキュラムモデルが全米を席卷したということではなく<sup>5)</sup>、むしろレベルの低いと言われてきた高等教育機関である州立大学やコミュニティー・カレッジが先行してきたと言われている。このような高等教育機関は、急速に進んだ高等教育進学率の上昇と留学生や高齢学生、マイノリティー学生などの非伝統型学生層の増大を早い時期から引き受けてきた。そうした中ではエリート型の高等教育どころかマス型の大衆の大学制度でも対応することができず、ユニバーサル型の高等教育制度に移行せざるを得なかったと言えるのではないか。教員との接触を増やすための少人数クラス、コミュニケーション能力の不足を補う言語表現教育、学生に助言や履修指導をするためのアドバイザー・オフィスといった改革は、まさに多様化した学生に対応したものであり、そうした多様化した学生を真っ先に大量に受け入れてきた高等教育機関は、早くから改革を行ない、多くの改革の成功事例を積み重ねてきたのである。逆にエリート大学の代表であるハーバードには最上級の学生が集まっていたため、これまではこのような手厚い教育は必要のないものであった。こうして見てくると、ハーバードがこれから行なおうとしているコア・プログラムの廃止という重大な決定がハーバードの教員や学生から大きな支持を得ていることは、むしろ当然のことかもしれない。全世界の高等教育をリードしてきたハーバードの自己改革としては遅きに失したというべきではないだろうか。

## 註

1) 文理学院(Faculty of Arts and Sciences)は、学士課程であるハーバード・カレッジと、その教員の所属する学部群、および文理大学院を包括している。

2) William C. Kirby: ハーバード大学文理学院学長(Dean of FAS)。専攻は中国史。1972年ダート

マス大学卒業、在学中にドイツのマインツ大学とウエルズレー大学に学ぶ。その後、ベルリン自由大学を経て、ハーバード大学院で1981年にPh.D in Historyを取得。1982年よりセントルイス・ワシントン大学教員、教授昇格。1992年よりハーバード大学教授。1995年～2000年歴史学科長。1991年より現職。

3) tenure: 大学教員の終身在職権。研究業績、取得した研究補助金、教務の業績などの審査により当該大学での身分保障が与えられる。

4) 報告書の全文:  
<http://www.fas.harvard.edu/curriculum-review/>

5) 1997年にハーバードが行なった学士課程カリキュラム再評価のための委員会。ヴァーバ委員長。

6) Henry Rosovsky: 元文理学院学長。専攻は経済学、歴史学(特に日本経済史)。1949年ウィリアム・アンド・メアリー大学卒業、ハーバード大学院でPh.Dを取得。1958年カリフォルニア大学バークレー校で教職に就き、日本の経済成長について調査研究。1965年よりハーバード大学経済学部教授。1973年より1983年まで文理学院学長。その後、経済学部教授に戻り、現在は名誉教授。

7) シンポジウムの詳細は  
<http://athome.harvard.edu/programs/curriculum/curriculum1.html>

8) The Chronicle of Higher Education (2004年5月7日)の記事による。

9) The Chronicle of Higher Education (2004年5月7日)の記事中で、報告書作成に関わった大学院生M.R. ウェストが学生の不満の例として語っている。

10) <http://www.registrar.fas.harvard.edu/Courses/Core/CoreCurriculum.html>

11) 田浦武雄(1992)「アメリカにおける大学カリキュラムの改革動向」『愛知学院大学教養部紀要』第40巻2号p10。

12) Distribution Requirement: 領域ごとに数科目を配置し、その中から一定の単位数を必修として選択させる方式。

13) Capstone Experience: 学士課程の「総仕上げ」(capstone)として行なう研究の経験を通して、学士課程で学んだ知識を統合し、視野を広げることを目指すこと。

14) The Chronicle of Higher Education (2004年5月7日)の記事による。

15) 波多野潔ほか(2002)『大衆社会における大学教育』晃洋出版,p.93

参考文献

B.A.Holland,1999 "hangeandtheUrbanUniversity:What'sinthisfortherestofHigher Education?"TheJournalofGeneralEducation,Vol48,No.2,p.211.

"CollegeStudies",HarvardMagazine,Jan.-Feb.2003

ThomasBartlett."What'sStrongwithHarvard",TheChronicleofHigherEducation.May2004.

H.ロソフスキー,佐藤隆三訳(1992)『ロソフスキー教授の大学の未来へ』TBSブリタニカ

W.B.カーノカン,丹治めぐみ訳(1996)『カリキュラム論争:アメリカ一般教育の歴史』E1(J1)11大学出版部

W.ジェイムズ(1998)『米国における大学改革:ハーバードの場合』『京都大学高等研究』4号、

有本章(2003)『大学のカリキュラム改革』W11大学出版部

今井重孝(1998)「大学カリキュラムの改革動向」『経済学教育』第17号

今井重孝(2001)「大学カリキュラム」『大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究』文部科学省科研費補助金研究成果報告書

綱川正吉,館昭(2004)『学士課程教育の改革』東信堂

波多野潔ほか(2002)『大衆社会における大学教育』晃洋出版

本家真澄(1986)「アメリカの大学における一般教育の実情視察報告」『大学資料』100号

清水畏三(1970)「"大学大衆化"時代における一般教育—ハーバード改革:一般教育の重要性を再主張」『一般教育学会誌』創刊号

清水畏三(1986)「ハーバードの一般教育改革,教員任用など—H・ロソフスキー前学部長に聞く」『一般教育学会誌』第8巻2号

田浦武雄(1992)「アメリカにおける大学カリキュラムの改革動向」『愛知学院大学教養部紀要』第40巻2号

田中義郎(2004)「アメリカの大学のカリキュラムの趨勢=コア・カリキュラムの開発と発展」『高等教育研究紀要』19号、

土持ゲーリー法一(2003)「アメリカにおける一般教育改革の歴史に関する一考察」広島大学『大学論集』第33集